

# Sur les freres et soeurs de Colette

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 孝江 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3778">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3778</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



研究ノート：

## コレットの兄弟について

### Sur les frères et soeurs de Colette

松田孝江

#### I. はじめに

コレット文学のなかには、洗練された文化都市と、豊かな自然のなかでたくましく生きるひとびとのいる田舎がある。コレットの圧倒されるような生命力はブルゴーニュ地方、ひいてはフランスの大地が育んだものといえよう。コレットが去った後もブルゴーニュの地に残った兄弟、とりわけ一家の要として重要な役割をはたしたアシルを中心に三兄弟の足跡をたどり、コレット理解の一助にしたい。

#### II. 長兄アシル

Achille Robineau-Duclos (1863年1月27日 Saint-Sauveur-en-Puisaye 生—1913年12月31日 Paris で死去) は Jules Robineau-Duclos (1814年2月9日—1865年1月30日) を父に、Adèle Sidonie Landoy-Duclos (1835年8月12日 Paris—1912年9月25日 Châtillon-Coligny) を母として、ブルゴーニュ地方ヨンヌ県西部の小村サン＝ソヴール＝アン＝ピュイゼー (以下サン＝ソヴール) で生まれた。このとき父49歳、母は28歳であった。アシルの上には姉の Juliette Robineau-Duclos (1860年8月14日 Saint-Sauveur—1908年9月9日 Charny) が生まれていた。アシルが生まれた当時、サン＝ソヴールのひとびとは、アシルはジュールの子供ではなくシドニー (通称シド) の愛人コレット (通称キャプテン) Jules Joseph Colette (1829年9月26日 Toulon—1905年9月17日 Châtillon-Coligny) の子供だとささやきあった。キャプテンとは、長女ジュリエットが誕生した頃この村に赴任してきた収税吏のことで、軍隊で歩兵隊長 Capitaine d'infanterie を務めていたことからキャプテンと呼ばれ、イタリア戦役で負傷したため左足は義足だった。アシルの父

ジュール・デュクロはアシルが生まれて2年後の1月に卒中の発作で死亡するが、かねてからの飲酒癖が高じて夫婦仲が冷えきっていたことは周知の事実だった。ジュールの死に二人が関与していたという噂もあったらしい。1939年にジュールの従兄弟である Emery 家を訪ねたサルトルはボーヴォワールに宛てて書いている。「コレットのあの有名な母親シドが、伊達男のキャプテンと結婚したくて夫に毒を盛ったというのは本当らしい。」サルトルのこの言葉は、ジュール側の親族の心情を代表している。夫の死から11ヶ月後の1865年12月20日、シドはキャプテンと再婚し、キャプテンはシドの家に移り住んだ。よそ者キャプテンとの手際良い結婚が周囲の反感を買ったことは想像に難くない。コレット家にはその後レオポルド（通称レオ）Léopold Jean Colette（1867年10月22日 Saint-Sauveur—1940年3月7日 Bléneau）と、長じて作家になる Sidonie Gabrielle Colette（1873年1月28日 Saint-Sauveur—1954年8月3日 Paris）が誕生した。

村で初等教育を終えたアシルは、オセール Auxerre の公立中等学校に進み寄宿生活に入った。身長180センチ、緑がかった眼、カールした栗色の髪のアシルは、母シドの自慢の息子で成績も良く、1882年パリに出て医学部に入った。1890年に医師の資格を取ると、同年2月に Châtillon-sur-Loing—現 Châtillon Coligny（以下シャティヨン）一で開業した。シャティヨンはヨンヌ県に隣接するロワレ県にあり、サン＝ソヴールから北西40キロほどに位置している。現況では、サン＝ソヴールが坂の上を中心とする人口1000人の小村である一方、シャティヨンは運河に囲まれ、人口3000人の明るい雰囲気のある町である。アシルが故郷の村ではなくシャティヨンに移り住んだことは悪くはなかったといえる。アシルは公衆衛生医の委託も受けて、多忙な日々が始まった。しかしその間にサン＝ソヴールの父母の家では急激な変化が生じていた。

1882年にアシルが勉学のためにパリに出た後、1884年に姉のジュリエットが地元医師 Charles Roché（1855年—1914年）と結婚し、実家と目と鼻の先の Rue de la Roche 通りに居を構えた。夫婦には翌年娘 Yvonne（1885年 Saint-Sauveur—1953年 Auxerre）が生まれた。一家の主キャプテンは、県会議員に立候補するため1880年に51歳で収税吏を引退したが、選挙は敗北に終わった。1879年についた郡議員のポストも、“過激な”言動により1882年には解任されてしまう。退職前には収税吏としての年俸約4500フラン、軍

人年金 1600 F、負傷と引きかえに手にしたレジオン・ドヌール勲章の年金 500 F、総額 6600 F はあった年収が、退職を境に収税吏の年金 1447 F を含め、3547 F と半減してしまった。シドは前夫ジュールのもとに、公証人の家系でこの地方随一の裕福な地主という身分に引かれ、年齢差には目をつぶって、当時兄と暮らしていたベルギーから嫁いできた。しかし娘ジュリエットの夫が、結婚するやいなや亡き義父の遺産の妻の持分を要求してきたので遺産を整理してみると、ジュールの遺産は推定 250000 F とされたが、負債も 97000 F あった。負債には、ジュールとシドの結婚前にジュールの愛人だった小間使い Marie Miton が要求している 10000 F も含まれていて、しかも二人の間に生まれた私生児 Antonin Miton (シドより 8 歳下) は、ジュールの遺産相続人たちが毎年年賦金を払うよう要求していた。1884 年の家裁の調停により、ジュールの遺産はシドとジュリエットとアシルで三分割することになった。一家の財政は、1880 年の夫の退職、1882 年のアシルの医学部進学、1884 年のジュリエットの結婚と遺産分割など、収入は減りながら出費はかさむばかりという危機的状況になった。ちなみに当時は小学校教師の年収が 1000 ~ 1500 F、郵便局長が 900 ~ 1800 F、ソルボンヌ大学の教授の年俸は高く 12000 F だったということから、生活を縮小すれば切り抜けられたはずである。事実四人いた使用人は一人にしたが、性格上夫婦揃って浪費家だった。こうしてアシルが学業を終えて開業した 1890 年頃には、一家の経済は破産状態だった。その結果 1891 年の末に夫婦は子供二人を連れて、サン＝ソヴールからアシルの住むシャティヨンに移り住んだのだった。アシルの家は教会通り Rue de l'Eglise に面した町の中心にあった。コレット一家はそこから徒歩 7 分ほど、墓地に向かう平等通り Rue de l'Egalité の小さな家に居を定めた。けれども庭が欲しいというシドの望みで、道路を挟んで斜め前の庭付き住宅に移った。レオは母の勧めで当初薬学の勉強を始めたが、幼い頃から音楽好きで夢想家のレオには向かず、この町に来てから Rue Dom Morin 通りの公証人事務所で書記として働いた。18 歳になっていたコレットはといえば、兄が一頭立ての二輪馬車ガブリエで往診に出かけるときは同乗して行って、兄の手助けをした。時にはその役目は母シドに回ってきた。

未来の作家コレットは、パリからやってきた通称ウィリーこと Henry Gautier-Villars と 1893 年 5 月 5 日にシャティヨンの市庁舎で結婚式をあげてパリに発った。それから 5 年後の 1898 年、今度はアシル自身が結婚した。妻

Jeanne de La Farre (1877年 Saint-Laurs [Deux-Sèvres 県] —1964年 Gagny [旧 Seine-et-Oise 県]) は、ポール・ド・ラ・ファール伯爵の娘で、伯爵はシャティヨンから7キロほど南のアドンの村長をつとめ、オルレアンで暮らしていたこともあった。ほどなくアシル夫婦はジュヌヴィエーヴ(1899年—1962年)とコレット(1901年—1986年)という娘二人に恵まれた。音楽好きなアシルは、多忙な生活のなかでも娘たちにピアノを教えるような子煩悩な父親だった。

1905年父キャプテンは肺気腫で死亡した。家の前の通りを少し登った左手にある、町の墓地に埋葬された。コレットはウィリーと車でパリから駆けつけた。しかし翌年二人は離婚、コレットは自立のため舞台生活に入ることになる。アシル、レオ、コレットの三兄弟は、キャプテンの遺産はすべてシドのものとし、さらに月々の母の生活費も分担した。1912年9月、今度はシドが乳がんで死去した。この年の末結婚することになるジュヴネルと多忙な生活を送っていたコレットは、母が会いたがっているという兄からの知らせに、ジュヴネルから三日間の許しを得て8月に母を見舞っていたが、葬儀には姿を見せなかった。母を見送った年の末、今度はアシル本人が体調を崩した。パリに出て学生時代の恩師に診断を仰いだ結果、腎臓がんと判明。急遽シャティヨンに帰って医院を同業の医師に譲り、家族でパリに出て治療を受けたが、1913年12月31日に51歳で死去した。アシルはシャティヨンで父母の眠る墓に埋葬された。36歳の妻ジャンヌのもとには、14歳と12歳の姉妹が残された。1913年はコレットにとっては、生と死が交錯した年となる。アシルの死の半年前の7月3日に40歳にして女兒の母になったからである。シドが孫娘の顔を見ることはなかった。レオは両親の死後故郷を去ってパリに行った。コレットが母親をはじめ、親しい人の葬儀に列席しなかったことを非難する向きもあるが、無神論者コレットは、「死について、私は関心がない、たとえ自分の死であっても」と語っていて、それもコレットらしい。母が亡くなったとき、彼女は友人に宛てた手紙で、週二回手紙を出す相手がなくなってしまってどうしたらよいかしら、と訴えている。確かにコレットは、よくシドに手紙を出した。コレットが1905年から頻繁に母に出した絵はがきは残されているが、手紙の類は残っていない。その理由について、伝記によっては、なかなか見舞いに来ないコレットに腹を立てていたアシルが、母に宛てた手紙をすべて破棄してしまったのだとしているものもあ

る。しかし上述のように、9月に母を失ったアシルは、同年12月にはがんを宣告されて一家でパリに引越し、1年後に母の傍らに眠る運命にあった。この慌しさのなかでは、手紙の束が紛失しても不思議ではない。ただ残念なことは、その結果絵葉書には書きにくい、コレットの心理を知ることが失われたことである。

ところでサン＝ソヴールのホスピス通り Rue de l'Hospice (現コレット通り Rue Colette) にあるコレットの生家はどうなったか。この家は、コレットの父母が引越す際売却していったとする従来の説を、Pichois-Brunet ははっきり否定した上で、つぎのように記している。ホスピス通りの家は、1884年のジュールの遺産分割に際してアシルの所有するところとなった。1913年にアシルが亡くなったとき、所有権は妻 Jeanne と二人の娘ジュヌヴィエーヴとコレットに移った。三人は1925年にこの家を、作家コレットの熱烈なファンだった、リヨンの絹織物商 Francis Ducharne 氏に売却した。翌年 Ducharne 夫妻はこの家の用益権を作家コレットに贈った。1946年以来この家には、アルザス出身でフランス中部に逃れてきていた医師の Pierre Muesser 夫妻が借家人として住んでいたが、1950年12月21日、コレットと Ducharne 夫妻は彼らにこの家を売却した。現在この家は彼らの子供たちが所有している。筆者が訪れたとき、確かに表札は Docteur 某となっていたが、その名前は記録してきていない。H.Dufour が著したコレットの伝記 (p.114) によれば、コレットは公証人を介してこの家の家賃収入をしっかりと懐に入れ、売却時には Ducharne 夫妻からかなりの額を受け取ったという。

アシルが1913年に一家をあげてパリに移るときに医師の Lefère 氏に譲り渡したシャティヨンの教会通りの家は、この地方によくあるように、現在パリに住む人の屋敷になっているが、今では所有者も高齢になって年に二度ほどしかやって来ない、中も荒れたままです、とシャティヨンの観光事務所の Michel Bonneau 氏は筆者に語ってくれた。藤のつるを冠した鉄格子扉の向こう、写真でよく見るコレットの一家五人が玄関前の石段に座っている風景のその場所には、猫が一匹寝そべっていた。家をカメラに収めていると、隣家から男性が顔をのぞかせ、「写真ですか、よくみんな撮っていきますよ」と言った。

### Ⅲ. 次兄レオポルド

シャティヨンで母親が世を去ったとき、コレットより6歳上の兄レオポルドはパリに移って公証人事務所の書記になったが、定期的にシャティヨンに帰ってきていた。レオは根っからの自由人で、アシルの長女ジュヌヴィエヴがシャティヨンから15キロほど南東の村 Bléneau の獣医師 Viot に嫁ぐときは、花嫁の介添え役としてパリからスーツケースをひとつ持ってやってきたが、中味は靴下一足で、貸衣装を借りたのだった。パリではレオは時にパレロワヤルのコレットの家に夕食時に姿を見せ、女中のポリヌに伸びたひげを剃ってもらって夕食をご馳走になったが、コレットが「そんな汚い格好をして」と言うのと、「新品を一揃い買ってくれないかね」などと言って帰っていった。レオの趣味はビリヤードとピアノ、それに切手の収集だった。晩年不遇をかこっていた Willy の所にもたまに顔を見せ、ウィリーと一緒に食事をして、少しだけ切手を買ってやったりした。そんなわけで、ウィリーが1931年1月12日に死亡したときも、レオは葬儀に出席した。コレットは姿を見せなかった。レオがある日マンションのエレベーターの中で倒れているのを発見した管理人は、コレットに連絡した。脈が弱くなっていた。ブレノーに住むジュヌヴィエヴは当時夫が召集されていたが、レオを自宅に引き取った。レオはブレノーに発つ前に切手をコレットに託していった。コレットは1939年9月3日付けの手紙で「切手は銀行の金庫に預けました。いつでも取り戻すことはできますから。」と書いた。レオは1940年3月7日、73歳で生涯を閉じ、シャティヨンにある一家の墓に埋葬された。死後競売にかけられた切手は、総額39000Fで落札された。ジュヌヴィエヴはレオの遺産として18000Fを得た。コレットは、実際にはその1000倍の1800万Fはあったはずとしている。ジュヌヴィエヴの妹のコレット・ヴィールは、作家コレットの夫モーリスへの恨みを語っている。好きな女性がいても告白できないような性格のレオは、生涯独身だった。

### Ⅳ. 姉ジュリエット

コレットより13歳年上のジュリエットは、刺繍が得意の女性だったが上述のように、1884年に24歳で医師 Charles Roché と結婚し、結婚後はサン＝ソヴールで実家に近いロッシュ通り Rue de la Roche の家に住んだ。時を経ず夫の要請で出された、ジュリエットの亡き父ジュールの遺産要求は、コ

レット一家との関係を一挙に悪化させた。夫と実家とのほぎまで苦しんだジュリエットは、結婚2ヶ月後に服毒自殺をはかった。ジュリエットには常に暗い影が付きまとう。父親からアルコール依存症を受け継いでいる、彼女の夫は娘イヴォンヌと道ならぬ関係にある等々。相続争いの後、ジュリエットは母シドと仲直りし、コレットとも手紙のやりとりをしていた。だがジュリエットは、1908年に服毒自殺で48歳の生涯を閉じてしまう。シドはひそかにジュリエットが死んだのは、彼女の夫が故意に強すぎる鎮静剤を投与したからだと考えた。娘のイヴォンヌは、結婚して夫との間に二人の息子をもうけ、孫にも恵まれた。ジュリエットは牧歌的なレオとは対照的な人生を送った。

## V. おわりに

筆者は昨年休暇を利用してサン＝ソヴールとシャティヨンを訪れた。『クロディーヌの家』に描かれているサン＝ソヴールを歩いてみると、コレットが描いた生家や教会、村の小学校などは、直径一キロほどの中にすっぽり入ってしまうような小さなコミュニティーだったことがわかる。『クロディーヌの家』はコレットが少女時代の体験をもとに、豊かな想像力を駆使して作り上げた世界だったのである。コレットは63歳の時発表した『わが修業時代』のなかで、クロディーヌの少女時代の描写に関して「子供同士の関係をおもしろおかしく、お国訛りのことばをふんだんに取り入れるように」とウィリーにアドヴァイスされたと言っている。読者を楽しませるために事実を脚色することはよくあることであるが、小学校時代の友人のなかには、歪曲して描かれたことに憤慨し、一生コレットを恨んだひともいるし、サン＝ソヴールの住民たちは、コレットが作品の中で村の尊厳を傷つけたと思っていた。そんなわけで1925年の秋に、コレットの生家の正面に記念プレートを取り付ける話が持ち上がったとき、サン＝ソヴールの村長は、村人たちの気持ちを付度して協力を拒んだのだ。 (Pichois et Brunet p.342 参照) 筆者はサン＝ソヴールから10キロ北にあるサン＝ファルゴに宿をとったが、宿の女主人は、「少女時代にクロディーヌものを読もうとしたら母親に取り上げられそうになり、ベットの中で隠れて読んだ」と語った。『学校に行くクロディーヌ』にはレスピアンの要素が盛り込まれているし、“教育的”書物とは言いがたい。

ところで結婚前までブリュッセル近郊に住む長兄ウジェーヌの家で暮らしていたコレットの母シドは、どういういきさつからフランスの片田舎に嫁ぐことになったのか。生後まもなく母に死なれたシドは、里子に出されて2歳までサン＝ソヴールに近い Mézilles の村の車大工の家で育てられた。シドはその後も毎年里親に会いに来ていたという。1848年、政情不安なパリで兄の家にはいた13歳のシドは、兄の配慮でしばらく里親のもとで過ごしている。なぜ Mézilles の村が選ばれたのか詳らかでないが、都会から来た美しい少女は、ひとびとの関心を引いたに違いない。42歳のジュールに求婚された21歳のシドは、1857年1月15日にブリュッセルで結婚式をあげた。同年4月26日ウジェーヌには初めての子供が誕生、次兄のジュールも同年5月11日にクレマンティーヌと結婚している。兄たちから結婚を強要されたわけではなかったが、シドも兄の庇護を離れて身を固めなければならない年齢に達していたことだけは確かである。そんなわけで持参金のないシドは“裕福な”ジュールの妻となり、サン＝ソヴールに移り住んだ。

シドの娘コレットとウィリーの出会いのきっかけを作ったものはなにか。これは父親同士が知り合いだったためとする説がある。ウィリーの父は出版業を生業としていて、そこから出版された雑誌にコレットの父親の名前が掲載されているものがあること、二人の経歴には同じ戦場で戦っていた時期があることは明らかになっている。しかしそれだけのことから、子供たちの結婚が父親同士のお膳立てによるものと断定するには無理がある。確かなことは、ここにも里子が関係しているということである。コレットと結婚する前、ウィリーはある女性と恋に落ち、男児が生まれたがその女性はまもなく病死した。ウィリーは赤子をシャティヨンに里子に出し、わが子に会うためにこの町を訪れていた。シャティヨンでは、公衆衛生医でもあったアシルが乳幼児の面倒もみていたし、コレットは兄の診療の手助けをしていた。母シドは、娘ジュリエットに宛てた手紙の中で、ウィリーが自分の子供を近所に里子として預けにきたことを知らせている。フランス中部のこの地方は、自然豊かで里親の多い土地のひとつだった。この里子の風習こそ、コレットの母シドばかりかコレット自身の生涯をも決定づける出会いのきっかけとなったのである。

**参考文献**

- Augier, J. : *Colette et la Belgique*, Ed. Racine, 2004  
Dufour, H. : *Colette, La vagabonde assise*, Ed. du Rocher, 2000  
Francis, C. et Gontier, F. : *Colette*, Perrin, 1997  
Pichois, C. et Brunet, A. : *Colette*, Ed. de Fallois, 1999